

九州大学総合研究博物館 ニュース

The Kyushu University Museum News

創刊号

念願の総合研究博物館

九州大学
総 長

杉岡 洋一

総合研究博物館の設置は、総長就任直後から抱いた幾つかの重要課題の1つであった。その理由は、第1に本学の約一世紀の歴史の中で、先達の研究活動によって齎された、西日本やアジアを中心とした貴重でかつ膨大な数の学術標本が各部局に分散収納され、劣化の危険があることである。またその中には希少種や絶滅種など再度手にすることの困難なものも多く含まれており、DNA解析やその他の最新の分析手段を駆使すれば、本学にとって学問的価値の高いものばかりで、良好な環境下での一元的管理保存が急がれると同時に、分類整理を進め実証的教育や学際的研究に供することにより、計り知れない教育・研究効果を本学に齎すと考えたからである。その上、本学は移転計画が進行中で、移転開始前に所蔵標本の確認、分類作業とそのデータベース化を終了しないと、貴重な学術標本の散逸、破損は免れないわけで、理想的には移転地に早期に博物館を建設し、移転作業前に学術資料の収納を終えておくことも念頭においたからである。

この考えのもとに、1996年初頭より検討作業に入り、11月に設置準備委員会を発足させ、志垣嘉夫比較社会文化研究科長に副委員長をお願いし実務を担当していただいた。委員会の調査によって、日本人の起源解明の研究資料となった3000体の出土古人骨と膨大な考古学資料、380万点の昆虫標本、環太平洋地域産白亜紀アンモナイト・イノセラムス化石を中心とした約8000点の化石標本、5600点の東アジア産鮫物標本、インド洋・太平洋の稚魚を中心とした200万点を超える水生生物標本、約25000点の植物標本などの存在が明らかにされた。この間、志垣先生が急逝されると言う不運に見舞われたが、有馬前研究科長、嶋研究院長のご尽力と、あるときは徹夜に近い実務をこなしていただいたワーキング・グループ委員(青木義和・中田正夫教授(理)・中園明信・湯川淳一教授(農)・牧之内顕文教授(シ情)・田中良之教授・西弘嗣助教授(比文))のほか、佐野弘好教授(理)・緒方一夫助教授(熱研)・望岡俊宏助手(農)等数多くの教官・事務職員の献身的なご努力によって、念願の総合研究博物館が2000年度に設置

される運びとなった。

また概算に向けての実績づくりと地味であるが永年大学で行われている基礎研究の重要性を社会に認識していただくために、ユニバーシティミュージアム先行展示(「倭人の形成」(比文)、「雲仙普賢岳の噴火とその背景」(理)、「寄生虫学の展開と医の文化」(医))、第1回公開展示「森・水・人」(農・演習林等)を総長裁量経費を用いて行ったが、これも担当部局の大変なご尽力により大成功を収めることができた。また、高田健次郎名誉教授(理学研究科長)の企画によるインターネット博物館も画期的成果を収め、博物館構想の実現に大きく寄与していただいた。

このような実務に当たって下さった多くの教職員の方々の血のにじむようなご尽力と、全学を挙げての御支援があった、はじめて総合研究博物館が実現したわけで、紙面を借りて深謝申し上げる次第である。今後、湯川淳一初代館長のもとで、先行設置された他大学博物館を凌ぐ理想的な世界に誇る博物館づくりが進み、本学の将来にとって最も価値ある研究博物館として機能することを願って止まない。

総合研究博物館の役割

九州大学総合研究博物館
館 長

湯川 淳一

待望の九州大学総合研究博物館が4月1日にオープンしました。九州大学は、これまでの様々な研究で蓄積された膨大な数の標本や資料を持っています。この博物館の重要な仕事の一つは、個々の研究室などに分散して保管されているこれらの貴重な標本や資料を一元化して保存・管理を行い、誰もが教育や研究に利用し易い状態にすることです。標本や資料の情報を順次データベース化し、インターネットでアクセスもできるようにします。また、私たちは今後も新たな標本や資料の調査・収集活動を行うとともに、研究成果の公開展示など様々な活動を通じて、学外の人々との交流を深めたいと願っています。さらに、学芸員の資格取得に必要な講義や実習を、できるだけ学内でできるようにしたいと考えています。

新しくできた九州大学総合研究博物館を、ぜひ、応援して下さいようにお願い致します。

総合研究博物館に期待すること

九州大学比較社会文科研究院
院長

嵐 洪

オックスフォードの動物学博物館を訪問した時、教材用にそろえられたイギリス産の全種の昆虫標本や、1800年台の初期の標本が要求に応じて直ちに取り出され、その場で研究できるという体制に、材料を扱う教育・研究はこうあるべきだと感激した。私達の博物館も、全学の資料・標本の管理や利用に関して、他に誇れる体制を作り上げたい。そのための条件がやっと整ったと思う。長年のあいだ標本にたづさわってきたものの切実な希望である。

九州大学理学部等事務部
事務長

山下 聖夫

日本は成熟社会に達し、21世紀には高度情報社会の中で「心の豊かさ」の育成を求められている。そして、生涯学習の場として博物館を核とする博物館時代を迎える。

このような環境のもとで、九州大学博物館が社会と学校教育にどのように関わり、その役割を果たしていくかが期待されている。学術標本等を整理保存して高等教育研究機関等に開示し教育・研究の進展に寄与する責務は当然のことながら、地域の市民社会への窓口としていかに身近なものとなるか、優れた企画と情報発信が望まれる。

北九州市立自然史博物館
業務課長

藤井 厚志

近年、各地に続々と新築あるいは改築されている公立や民営の大型博物館は、昨今の必然的な社会的ニーズのもとで娯楽性や興行性を大きく取り入れています。大学博物館としての本来の教育と研究にもっとも効果的な活動を目指していただきたい。新聞報道によれば、3万点に近いタイプ標本を含む膨大な量の標本や資料のデータベース化が始められ、また折々に最先端の研究結果の先行的な公開・展示も行われているようです。暗雲立ちこめるとまでは言えないにしても、不安の多い未来に正しい目を向けた研究者や教育者が数多く生まれ、多くの人の考えるための糧の蔵となることを一番の願いとしています。

福岡アジア美術館
学芸員

ラワンチャイクン寿子

九州大学に今春開設された総合研究博物館には、単に研究が中心の機関にはなっていない、と思っています。博物館や美術館は、たとえ「研究」という名称がついていても、研究者のためにだけあるのではなく、一般の人々のためにあると考えるからです。一般に開かれた博物館として、89年の歴史のなかで各学部で蓄積されてきた膨

大な資料を、ジャンルを横断するようなユニークな視点からテーマを設け、素人にもわかりやすい展覧会を開催してほしいと願います。そのためには、美術館や博物館で展覧会の企画や教育に携わってきた経験ある学芸員の存在が不可欠でもあるでしょう。

福岡植物研究会
代表

筒井 貞雄

九州大学総合研究博物館の開設は、私にとっては夢かとも思える朗報であった。何故なら、九州大学の植物標本が公開される上に、福岡植物研究会が収集した推定5万点の標本を受け入れて下さるといのであるから、大量の標本の保管に苦勞してきた会にとっては、この上もない喜びであった。植物標本は利用されなければ、反古と同じである。一日も早く建物が完成して、所蔵標本についての情報が世界に向けて発信する態勢が整えられることを心から期待する。

筑紫女学園高校
社会科教諭

七枝 ひとみ

九大がこれまで蓄積してきた貴重な資料を管理・保存し、その学術的成果と共に一般市民にも広く公開して頂けるような機関が発足することは大変喜ばしい。教育の現場でも学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習を推進すべく模索が始まったところである。各教科で学ぶ“点”状の知識が“線”としてつながるような総合的な教育を行うには教員側の準備と工夫が要求されるだろう。そのためにも我々教員自身、原資料に当たり研究する等これまで以上の自己啓発が必要になると考える。また生徒にも、教科書にある受験用知識のみならず、郷土に根付く生きた教材である原資料から学習できる機会を与えたい。こうしたニーズに応えるよう、相応の専門スタッフを充実した受け入れ体制を備えて頂きたい。今までにない特色ある博物館が開館することを期待するものである。

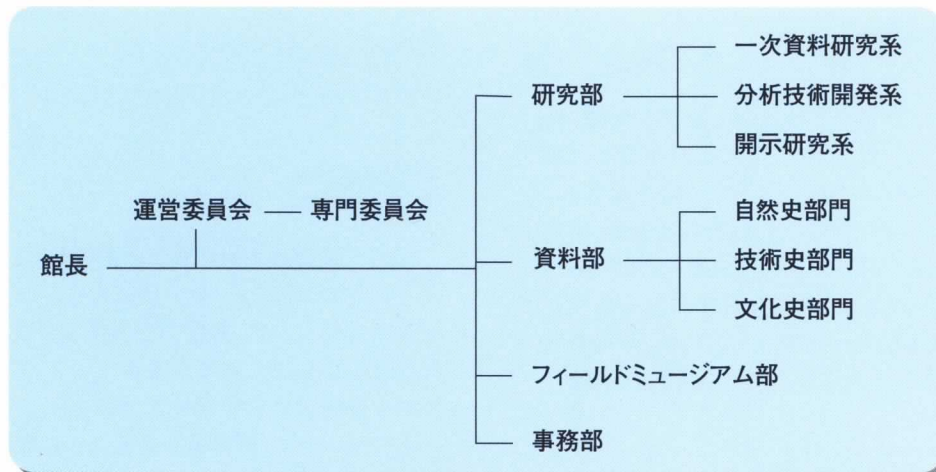
九州大学大学院理学研究科
修士2年

大東 佳奈

九大に博物館ができた。これで、様々な分野の学術標本に出会う機会が増す、そう思うとわくわくする。その博物館には、学内外を問わず多くの人に身近な存在であることを期待したい。例えば既卒業者等が学び直し、新たな知識を得ることができる場であってほしい。さらに若い世代にとっても、手を動かし五感を働かせて好奇心を養える、学ぶことは楽しいことだという実感が得られる場であればよいと思う。また、学内でどのような研究が行われているか、具体的な展示、データベース化がなされれば、進路選択の指標にもなるだろう。博物館とは、誰もが興味を持ったことを楽しく学べる場所のことだと思う。この博物館が皆に親しまれる場になることを期待する。

総合研究博物館の紹介

組織



運営委員会委員

湯川淳一(総合研究博物館館長、委員長)
 柴田洋三郎(副学長、副委員長)
 有川節夫(附属図書館長)
 佐伯弘次(人文科学研究院)
 轟 洪(比較社会文化研究院)
 福田晴彦(人間環境学研究院)
 熊野直樹(法学研究院)
 荻野喜弘(経済学研究院)

廣田 稔(言語文化研究院)
 島田允堯(理学研究院)
 山田光太郎(数理学研究院)
 古野純典(医学研究院)
 名方俊介(歯学研究院)
 正山征洋(薬学研究院)
 井澤英二(工学研究院)
 金子邦彦(システム情報科学研究院)

武部博倫(総合理工学研究院)
 中園明信(農学研究院)
 奥田篤行(生体防御医学研究所)
 柏木 正(応用力学研究所)
 藤井丕夫(機能物質科学研究所)
 総合研究博物館: 岩永省三、松隈明彦
 中牟田義博、中西哲也
 宮崎克則

館長



湯川 淳一
 (YUKAWA Junichi)
 農学研究院昆虫学研究分野教授

専門分野: 昆虫分類学、昆虫生態学、虫えい学
 和歌山県出身。大阪府立大学卒業後、九州大学大学院に進学。1963～1964年にハワイのビショップ博物館、1973～1974年に大英博物館で双翅目タマバエ科の分類学的研究に従事。1984年にジョージア大学交換教授。1997年に鹿児島大学から九州大学に移り、2000年4月1日から総合研究博物館館長を兼任。最近の研究テーマは「虫えい形成昆虫と寄主植物との相互関係」、「昆虫の生存に及ぼす地球温暖化の影響」、「インドネシア島嶼の生物多様性」など。著書に「日本原色虫えい図鑑」、「虫こぶはひみつのかくれが」などがある。

e-mail: director@museum.kyushu-u.ac.jp
 jyukawa@agr.kyushu-u.ac.jp

研究部

一次資料研究系



教授 **岩永 省三**
 (IWANAGA Shozo)

専門分野: 日本先史学、社会変動論、対外交渉論
 東京都出身。1981年、九州大学大学院文学研究科修士課程を修了。本年10月まで奈良国立文化財研究所で平城宮・平城京など古代都城と多くの寺院などの発掘調査・研究に従事。専攻は日本考古学。主要テーマは、A. 弥生時代の金属器とくに青銅器を中心素材として弥生文化の特性とその成因を解明すること。青銅器の機能変化と他の文化要素の時間的変化との運動関係の検討による社会・政治組織の変容の解明。B. 弥生時代以降の国家形成過程の解明。C. 古代国家形成に決定的影響を及ぼした7世紀後半から8世紀の対外関係の解明。フォルトナの悪戯で母校で奉職することとなった。

e-mail: iwanaga@museum.kyushu-u.ac.jp



助教授 **中牟田 義博**
(NAKAMUTA Yoshihiro)

専門分野: 鉱物学、隕石科学、X線結晶学

福岡県出身。九州大学理学部地質学教室で粘土鉱物を中心とした鉱物学を学び、1980年に鉱物の風化過程の研究をテーマとして九州大学で理学博士の学位を取得。大学院を修了後、九州大学理学部助手として勤務し、X線回折法を中心とした粘土鉱物とフッセキの結晶化学的研究、X線回折法による極微小結晶の精密解析法の開発等の研究を行ってきた。現在は隕石中の鉱物を調べることにより、太陽系形成初期における惑星進化過程についての研究を行っている。新設された総合研究博物館へ移り、総合研究博物館が九州大学における学術標本の要としての役割を果たせるように、努力したいと考えている。

e-mail: nakamuta@museum.kyushu-u.ac.jp



教授 **松隈 明彦**
(MATSUKUMA Akihiko)

専門分野: 古生物学、軟体動物分類学

現在の研究テーマは、(1) 紫外線を用いた化石標本の模様情報の可視化に関する研究、(2) インド-西太平洋産二枚貝の分類学的研究、(3) 軟体動物分類学関係の基礎的文献のデータベース化。

九州大学で6年5ヵ月勤めた後、国立科学博物館動物研究部で10年8ヵ月勤務し、1990年12月1日に九州大学理学部へ戻り、2000年4月1日から総合研究博物館で働くこととなった。専門は古生物学、特に軟体動物の系統分類学、種分化の様式と機構に関する研究。欧米の博物館はどこでも膨大な標本と文献資料を持ち、分類学を志す研究者のメッカとなっている。九州大学は古生物学、昆虫分類学の分野では国内有数の標本を有する研究の中心である。これらの標本が多くの人に利用され、新しい研究の発展に役立つような新たな情報の抽出・発信に努めたいと思う。

e-mail: matukuma@museum.kyushu-u.ac.jp



助手 **楠本 美智子**
(KUSUMOTO Michiko)

専門分野: 日本近世史

現在の研究テーマは、(1) 近世商人資本の生成・発展過程について、(2) 商品流通の史的研究。

学生の頃、旧法文系の建物の地下に夏は涼しく冬はだるまストーブが赤く燃えて暖かい九州文化史研究所があった。江戸時代の史料に今ほどの関心が持たれなかった頃、散逸を防ぐために寄贈を受けたり、購入した史料を整理していた。誰もが閲覧でき、先生方が共同研究する学内措置の研究所であった。研究所は文学部附属施設となり、比較社会文化研究科所属さらに博物館と紆余曲折はあったが卒業以来、私はそこで史料の整理・閲覧・管理維持を担当してきた。くずし字を読む学生が少ない今、学外の経験豊富な老人力を頼りにして史料整理を進めている。

e-mail: michiko@lit.kyushu-u.ac.jp



助教授 **中西 哲也**
(NAKANISHI Tetsuya)

専門分野: 鉱床学、地球化学

研究テーマは、(1) 誘導結合プラズマ質量分析装置を用いた極微量元素の分析、(2) 非平衡条件下での熱水-岩石相互反応に関する研究、(3) 珪質温泉沈殿物(シリカシンター)の微生物学的・地球化学的キャラクタリゼーションに関する研究。

福岡県久留米市出身。九州大学工学部資源工学科及び大学院を通じて鉱床学を学び、主として温泉型金鉱床の生成過程に関する研究を行ってきた、同研究院の助手に任官後、工学博士の学位を取得し、2000年4月から総合研究博物館に移った。九州大学が所蔵する様々な学術標本に対し、新しい側面から分析法を開発・適用してゆく事で私の役割を果たしたいと思う。

e-mail: nak@museum.kyushu-u.ac.jp

研究部

開示研究系



助教授 **宮崎 克則**
(MIYAZAKI Katsunori)

専門分野: 民衆文化論

九州大学文学部において歴史学を専攻し、大学院へ進学した後、当時の文学部附属九州文化史研究施設の助手として長らく勤務する。その間、古文書・古地図などの歴史史料をもとに研究を進め、1995年に『大名権力と走り者の研究』を上梓し、博士(文学)を取得した。現在の研究内容は、以下のようである。

(1) 文献史料・口頭伝承・記念碑などを利用し、近世日本の民衆文化論を研究する。最近では日本のみならず、イギリス・フランスとの比較検討をおこなうための準備も進めており、前近代における民衆世界を再検討する。(2) 画像データの管理システムの開発とともに、学術標本データに内在する特性を自動抽出する手法の開発をおこなう。

e-mail: miya@lit.kyushu-u.ac.jp



助手 **小島 弘昭**
(KOJIMA Hiroaki)

専門分野: 昆虫分類学、系統進化学

研究テーマはゾウムシ類を中心とした植食性甲虫類の分類、系統、生物地理、進化。

名古屋に生まれる。東京農大で昆虫学の基礎を学び、甲虫目ゾウムシ上科の研究をはじめ。大学院はゾウムシ類の世界的権威である森本桂教授のいた九大に進学し、系統分類学を学び、東南アジアなどの熱帯地域へ調査に出掛け、アジア産の材料を中心に分類学的研究を行った。ポストク時代にはロンドンの自然史博物館を中心にヨーロッパの研究機関を訪問し、研究範囲をアジア以外へも拡げる。さらにオーストラリアCSIROへ留学する機会を得て、研究範囲を南半球にまで拡げる。その過程で実に面白い研究の世界を知り、この経験を基盤に今後の仕事を展開し、博物館のためにも役立てていきたい。

e-mail: kojima@museum.kyushu-u.ac.jp

研究部

研究支援推進員



杉本 健
(SUGIMOTO Takeshi)
e-mail: sugimoto@museum.kyushu-u.ac.jp

資料部

資料部は兼任教官と専任教官で構成されています。兼任教官につきましては、6月21日～7月21日に実施しました九州大学所蔵標本調査結果とともに、末尾の表に氏名のみを掲載させて頂きました。今後も九州大学所蔵標本調査を継続して行い、総合研究博物館の活動にご協力いただける先生方を兼任教官としてお願いしていく予定です。

事務部



専門職員 **城戸 義典**
(KIDO Yoshinori)
e-mail: kidoscz@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp



事務補佐 **山本 亜希子**
(YAMAMOTO Akiko)
e-mail: yamasscz@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

自問 大学の博物館ちゃ 何するとかいな
自答 何て いわれたって そら みんな大学ちゃえら そうやけど、何しよっちゃろうかと思うとっちゃけん。それをわかるようにしちやるっちゃろうも。
自問 わかるごとちゃ どうするとかいな
自答 そら はやりのインターネット使うたり、大学にある研究資料をつこうたり、使ってもろうたりするったい。
自問 ほんと できるっちゃろうか
自答 わからんばってん やらなしょうがなかと私自身の最初の思いです。
さ これからどうなっていくのか
それは九州大学総合研究博物館を支え、励ましてくれる人たちの熱意にかかっているとっています。新参ものです。皆様の御協力よろしくお願ひします。

活 動 状 況

4月 1日: 九州大学総合研究博物館設置。

5月11日: ダイジェスト展示を行いました。



開学記念日に合わせ、これまで「九州大学の研究過去・現在・未来」として行われた博物館先行展示(第1回:倭人の形成、第2回:雲仙普賢岳の噴火とその背景、第3回:寄生虫学の展開と食の文化)および今年度行われた博物館展示(森・人・水)のダイジェスト展示を記念講堂で行いました。

5月30日: 博物館の表札設置。



杉岡総長の揮ごうによる表札を総合研究博物館の研究棟に設置しました。

5月16日～6月 4日: 総合研究博物館公開展示。



総合研究博物館展示「森・人・水」を農学部附属演習林の協力により福岡市博物館で開催しました。入場者総数は1万人を超え、農学部附属演習林のこれまでの研究や今後の研究に大きな関心が寄せられました。

6月 5日: 第1回九州大学総合研究博物館運営委員会を開き、総合研究博物館の組織や運営規則を決定し、欠員となっている一次資料研究系教授と開示研究系助手の選考委員会を設置しました。

6月21日～7月21日: 九州大学所蔵標本調査のためのアンケートを全学に配布し、九州大学に現在所蔵されている学術標本の調査を行いました。アンケート結果の要約はニュースの最後に表としてまとめてあります。

6月23日: 開示研究系助手の公募を行いました。

6月26日: 一次資料研究系教授の公募を行いました。

7月 7日: 東京大学で行われました第3回博物館協議会へ、湯川淳一館長、城戸義典専門職員が出席し、博物館活動についての意見交換を行いました。

7月10日: 総合研究博物館のホームページを開設しました。

9月 4日: 第2回九州大学総合研究博物館運営委員会を開き、一次資料研究系教授と開示研究系助手の選考委員会結果や博物館兼任教官の任命について審議しました。

9月19日: 平成9年に行いました第1回博物館先行展示『倭人の形成』をインターネット版としてホームページに掲載しました。

9月22日: 6月21日～7月21日に行いました九州大学所蔵標本アンケート調査結果を基に『九州大学所蔵標本紹介』をホームページに掲載しました。

11月 1日: 一次資料研究系の岩永省三教授と開示研究系の小島弘昭助手が着任しました。

11月10日: 第3回九州大学総合研究博物館運営委員会を開き、博物館の中期計画について審議しました。

九州大学所蔵標本アンケート調査結果(平成12年7月実施)

標本・資料等の名称	点数	データベース化等	兼任教官
人文科学研究院			
考古学資料	2,870		
(小計)	2,870		
比較社会文化研究院			
地質学標本	9,381		山縣 毅、酒井 治孝、石田 清隆 西 弘嗣、桑原 義博
古人骨資料、考古資料	26,967	資料集を刊行	田中 良之、中橋 孝博、溝口 孝司
昆虫標本及び植物標本	994,500		轟 洪、矢田 脩
中世・近世・近代資料	400,000	「九州文化史研究所所蔵古文書目録」 として19号まで刊行	有馬 學、吉田 昌彦、服部 英雄 高野 信治、中野 等、安藤 保(文) 西村 重雄(法)、植田 信廣(法) 東定 宣昌(石炭研)、熊野 直樹(法) 田北 廣道(経済)、佐伯 弘次(文) 荻野 喜弘(経済)
(小計)	1,430,848		
人間環境学研究院			
近代建築遺物、近世建築遺物、近世・近代民具	261		福田 晴虔
(小計)	261		
法学研究院			
近世捕物用具類等	36		植田 信廣、熊野 直樹
近世・明治初期古文書類等	10,000		植田 信廣、熊野 直樹
(小計)	10,036		
理学研究院			
植物標本	14,500		矢原徹一
火山岩標本	250		
九州地域及び雲仙火山の地震データ (震源・波形)	32,000	地震波形については最近4～5ヶ 月分、震源データについては1995 年6月以降、インターネットで公開中。 1995年以降の地震波形データにつ いてはCD-ROM化(オフライン公開)	
雲仙普賢岳噴火関連VHSビデオテープ、 8mmビデオテープ、フォトCD	650	VHSビデオテープについてはリス ト作成済み、8mmビデオテープに ついてはラベル添付済み、35mmネ ガ・ポジフィルムはデジタル化して CD-Rに書き込み中	
アフリカ及びチベット海外学術調査資料	2,500		柳 哮
環太平洋地磁気ネットワークデータ	54(観測点)	1998年までのデータはデータベ ース化し公開中、1999年以降はデータ ベース作成中	湯元 清文
昭和30年頃から世界で初めて単離ある いは合成された芳香族カロチノイド	3		
海洋生物標本(魚類、底生生物、海藻類、ほか)	5,680		森 敬介
地質標本	27,300		佐野 弘好、坂井 卓
岩石標本	23,100		池田 剛、宮本 知治
鉱物標本(高標本、吉村標本を含む)	41,100	高標本について印刷公表済み	青木 義和、上原 誠一郎、中村 智樹
化石標本	85,100	模式標本、海外からの寄贈標本の 一部について印刷公表済み	佐野 弘好、高橋 孝三、石橋 毅 下山 正一、鹿島 薫
海底熱水系試料	30		石橋 純一郎
夾炭層標本	22,520		村江 達士、三木 孝、山内 敬明 北島 富美雄
鉱石標本	41,700		島田 允堯、本村 慶信
(小計)	296,541		

九州大学所蔵標本アンケート調査結果(平成12年7月実施)つづき

標本・資料等の名称	点数	データベース化等	兼任教官
医学研究院			
人体病理標本(主に脳神経)	100,200		
人体臓器標本	多数		
膀胱・腎結石	6		
法医学、犯罪学、人類遺伝学関係標本	数十点		
寄生虫体および臓器標本	380		
人体及び動物の解剖模型標本	139		
切除臓器の凍結標本、抽出したDNA RNA、培養細胞	500	データベース化完了	
(小計)	101,225		
歯学研究院			
日本人および台湾人一般集団歯列模型	1,450	目録作成済み	鈴木 陽
(小計)	1,450		
工学研究院			
資源工学及び材料工学関連標本	5,433	一部、目録とカードを作成済み	井澤 英二、渡辺 公一郎、福島 久哲
日本刀に関する資料および史料	150		
(小計)	5,583		
システム情報科学研究院			
機械翻訳実験機KT-1	1		
電気器具標本一式	57		
(小計)	58		
農学研究院			
昆虫標本	4,030,000	模式標本については、カードではデータベース化が完了。現在、デジタル情報として入力中、今年末を目標に公開予定。	多田内 修、紙谷 聡志、 緒方 一夫(熱帯農学研究センター)
タンガニイカ湖産シクリッド科魚類標本	200	目録作成中	
動物標本	1,373	一般標本について目録作成中	毛利 孝之、飯田 弘
魚類標本	500		
南洋植物さく葉標本(金平コレクション)	17,048	データベース化を進めており、85%が入力済み。さらに200点のタイプ標本に関して、外観写真を入力予定。	
作標植物標本(中島コレクション)	8,300		
平嶋嘉宏コレクション(1989年寄贈)； ホルネオ・バブアニューギニア等の民芸品	31	目録作成済み	
昆虫標本(アリ類)	11,215		緒方 一夫
魚類標本(内田コレクション)	1,450,000		望岡 典隆
海藻類さく葉標本(瀬川標本)	10,000		川口 栄男
イネの遺伝子資源(実験系統種子)	5,000	イネの遺伝実験系統データベースのためのデータ整理、リスト作成、画像データ作成が進行中	安井 秀
植物標本	13,000		
天敵昆虫標本	25,000		高木 正見、上野 高敏、津田 みどり
在来農具	100		
演習林 植物さく葉標本・材鑑標本	3,232	データベース化進行中	井上 晋
宮崎演習林植物さく葉標本・材鑑標本	719	データベース化進行中	井上 晋
北海道植物さく葉標本・昆虫標本	736	データベース化進行中	
魚類標本	1,020		松井 誠一
(小計)	5,577,474		
全学合計	7,426,346		